

山に行くヒト

— 領域の拡大と石材の獲得 —

津 島 秀 章

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

1. 武尊山に産する黒色安山岩
2. 武尊山麓で確認された遺跡

3. 下川田平井遺跡

4. 黒色安山岩の獲得
- おわりに

— 要 旨 —

これまでに武尊山麓の二遺跡(玉原遺跡(仮称)・藤原大芦遺跡(仮称))において、黒色安山岩製石器の製作に関わる遺跡が存在することが分かった。いずれも大形尖頭器の製作に関わる石器群であり、遺跡地近傍で獲得できる黒色安山岩の極角礫を利用している。黒色安山岩の獲得という観点からこれらの遺跡を評価すると、いわゆる原産地遺跡という評価を与えることは疑問である。武尊山中ではない下流域に黒色安山岩は存在し、そこで石材の入手はこと足りるからである。

一方、今回、群馬県北部の沼田市に所在する下川田平井遺跡において、大形尖頭器を組成する石器群の中に角礫状の黒色安山岩を利用しているものが発見された。武尊山中の原産地近傍で採取した可能性のある石材が流通していたことになる。しかし、この一遺跡の存在をもって、武尊山の原産地近郊が石材獲得において恒常的に機能していたとするのはやはり時期尚早であろう。

武尊山原産地近傍は、石器石材を補給する上でどのように機能していたであろうか。それを考察するためには、玉原遺跡・藤原大芦遺跡と他地域の石器群たとえば房谷戸遺跡や荒砥北三木堂遺跡などとの関係性をより詳細に追求していく必要がある。

キーワード

対象時代 旧石器時代最終末から縄文時代草創期初頭
対象地域 関東地方北部
研究対象 石器石材 黒色安山岩製石器

はじめに

群馬県域の旧石器時代遺跡を概観すると、黒色安山岩^①が主要な石器石材となっている。黒色安山岩の原産地として、当該地域周辺では群馬県北部の武尊山、群馬県西部の荒船山、群馬と長野県境の八風山が上げられる(桜井・井上・関口1993、津島・桜井・井上2001)。これまでに群馬県域の赤城山南麓地域を対象として、黒色安山岩製石器の原産地分析が実施されている。それにより、旧石器時代石器群では、武尊山の黒色安山岩が多用されていることが判明している(桜井・井上1999、津島2008・2010)。

前述したような原産地分析を進めるなかで、武尊山の溶岩露頭等の原産地を追究してきた。その過程で武尊山麓の二つの地点において、黒色安山岩製石器の製作に関わる遺跡が存在することが分かった(津島2004、岩崎・津島2011)。これらはいずれも主に大形尖頭器の製作に関わる石器群であり、使用石材は黒色安山岩に限定される。黒色安山岩以外の使用石材は一切認められない。また、石器の石材は、いずれも遺跡地近傍で獲得できる黒色安山岩の極角礫を利用している。

この二つの石器群に関しては、黒色安山岩の原産地に近接した場所に立地することから、原産地遺跡とも評価される可能性がある。そして、石器石材の補給構造(阿子島1989)を考察する上で極めて重要であると考えられる。

このような視点から、これまで上記二つの石器群と他地域に所在する石器群との関係を追究してきた。特に、この原産地石器群との関連を探るには、その他の石器群での黒色安山岩角礫を利用する石器の存在がひとつの手がかりになるものと予想された。現在まで赤城山南麓地域を中心として後期旧石器時代石器群を観察してきたが、黒色安山岩製石器の自然面は円磨度の高い資料が一般的で角礫状のものは一切みられない。石材の採取地は、専ら河川流域であったといえる。しかし、観察を進める

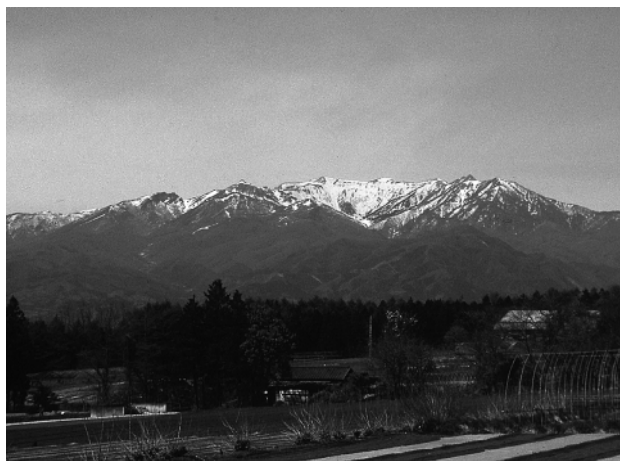


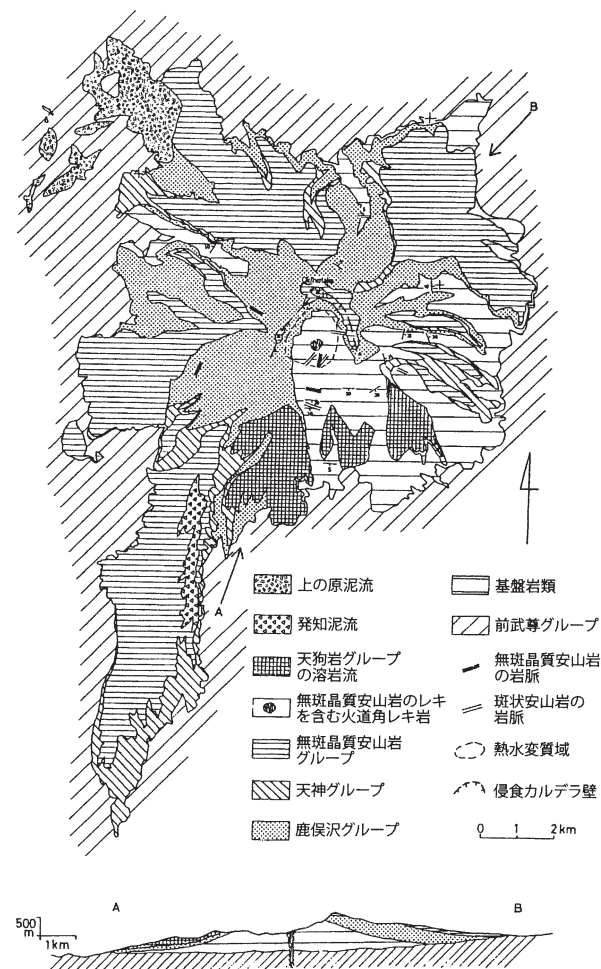
写真1 武尊山を南から望む

中で、群馬県北部の沼田市に所在する下川田平井遺跡(神谷1993)において、大形尖頭器を組成する石器群の中に角礫状の黒色安山岩を利用しているものが発見された。

拙稿では、下川田平井遺跡で確認された黒色安山岩角礫を利用している石器群を紹介する。そして、そのことから派生する石器石材の補給構造の問題について指摘したい。武尊山中に発見された二つの石器群と下川田平井石器群は、いずれも大形尖頭器を特徴的に組成するものである。その形態的特徴から、旧石器時代最終末から縄文時代草創期初頭にかけてといった編年的な位置付けが与えられよう。

1 武尊山に産する黒色安山岩

武尊山は群馬県北部の利根川上流部にあり、標高2158mの秀峰である(写真1)。石器石材に対する研究視点が喚起された当初から、黒色安山岩の産出地として知られていた。石器石材に利用される黒色でガラス質の安山岩は、「無斑晶質安山岩グループ」(山口1981)と呼ばれる溶岩に産出起源がある。「無斑晶質安山岩グループ」は複



第1図 武尊火山の地質構造(山口1981)

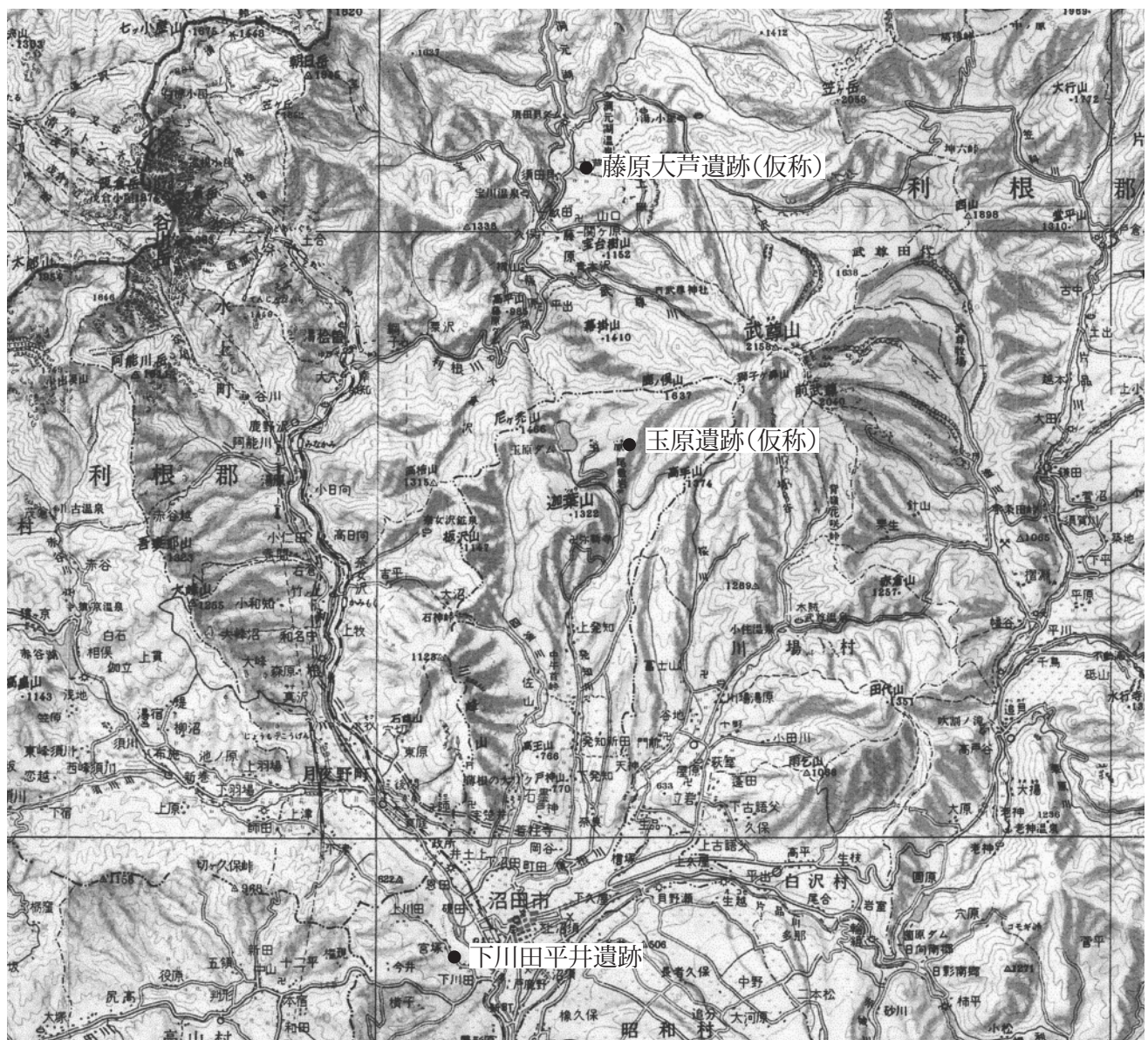
数の溶岩により構成されており、溶岩流は火口より四方八方に流出したようである。その分布は、武尊山麓の広大な範囲におよんでいる(第1図)。

現在までのところ、石器石材に利用されているものと同等の質をもつ黒色安山岩の溶岩露頭は、武尊山北麓の二つの場所で確認されている。木の根沢上流の細久保沢周辺の標高約1420mの地点(岩宿フォーラム実行委員会2006)とみなかみ町藤原の標高約1250mの地点である(岩崎・津島2014)。

また、河床礫の調査では、武尊山の北麓を流れる木の根沢とその支流に数多くの黒色安山岩礫が存在することが確認されている。石器石材に利用されているものと同等の質を備えたものは、現在、その下流の前橋市周辺の利根川中流域までで採取できる(桜井1995)。

黒色安山岩をめぐる石材環境を復元するという研究視点のもとに、武尊山産黒色安山岩の河川への供給のあり方について考察したことがある(津島・岩崎2011)。それにより次のような変遷が予想された。後期旧石器時代の当初、旧利根川中流域までの河床には黒色安山岩礫が豊富に存在していた。それは、当該期以前に武尊山から供給されたものであり、その後、武尊山原産地から黒色安山岩の大規模な河川への供給はなく、河床での黒色安山岩礫は減少していく。As-BPgroupl降下前の段階において、河床での黒色安山岩礫の拡散・流出に拍車がかかる。その後、当該地域での黒色安山岩礫は減少の一途をたどり現在に至る⁽²⁾。

ところで、これまでに赤城山南麓地域の複数の旧石器時代石器群を対象として、黒色安山岩製石器の原産地分



第2図 遺跡の位置(国土地理院20万分の1地形図「高田」「長野」「日光」「宇都宮」使用)

析が実施されている。それによると201点の分析資料のうち168点が武尊山産という結果を得ている(津島・岩崎2010)。旧石器時代の赤城山南麓地域にあっては、武尊山産の黒色安山岩が多用されるという傾向が強い。

2 武尊山麓で確認された遺跡

溶岩露頭等の黒色安山岩原産地を追い求める過程で、武尊山麓の二つの地点で石器が採集された。次に、この二つの遺跡について概要を記述する。

玉原遺跡(仮称、津島2004)

武尊山西麓の玉原スキー場内に位置し、標高約1400mである(第2図)。武尊山の山懷の閉ざされた場所にあり、険しい渓谷添いをかなりの標高差を上り詰めて到達することができる。これまでに314点の石器が表面採集されており、その内訳は、尖頭器未成品7点、スクレイパー15点、石核6点、二次加工ある剥片10点、剥片242点、微細剥片34点である。石材は全て黒色安山岩であり、土器は採集されていない。

尖頭器未成品はいずれも長さ10cmを越える大形品であり、完成された尖頭器も大形であったと予想される(写真2)。スクレイパーは縦長剥片を素材としており、素材剥片の形態を大きく変えることなく側縁部に刃部と想定される二次加工集中部が認められる。石核は非常に大形であり長さ20cmを越えるものもある。いずれの石核も剥片剥離があまり進行しておらず、不定形の大形剥片が生産されている。剥片及び微細剥片の形態は不定形であるが、尖頭器などの両面加工石器の製作時に生じるいわゆるポイントフレイクが相当数存在する。

また資料は、その一部に自然面をもつものが多い。自然面をみると、いずれも河床礫の特徴である円磨度の高いものでなく、極角礫を利用していることが分かる。当該地周辺では黒色安山岩の溶岩露頭は確認されていない



写真2 玉原遺跡(仮称)
左2点尖頭器未製品、右3点スクレイパー
左端は長さ155mm



写真3 藤原大芦遺跡(仮称) 南から

が、玉原スキー場周辺の複数の地点で黒色安山岩の極角礫を採取することができる。遺跡地周辺で採取できるこれらの極角礫を石器石材として利用していると考えられる。

藤原大芦遺跡(仮称、岩崎・津島2011)

武尊山北麓のみなかみ町大字藤原字大芦に所在し、標高約800mである(第2図)。利根川は、みなかみ町で谷川岳方面から下る赤谷川と合流する。遺跡は、その合流点から溪流沿いのルートを直線距離で約13km遡った利根川左岸に立地する。発見者は、地元在住の中島武氏である(写真3)。

これまでに106点の石器が表面採取されている。その内訳は、尖頭器未成品12点、スクレイパー7点、石核10点、剥片77点である。全て黒色安山岩製であり、現在までのところ土器は認められない。尖頭器はいずれも未成品であるが、玉原遺跡と同様に大形の尖頭器が製作されたものと想定される(写真4)。特に、基部を舌状に整形した尖頭器と考えられる未成品1点が確認されており形態的



写真4 藤原大芦遺跡(仮称) すべて尖頭器未製品
右下の石器は基部を舌状に作出している。
左上は長さ114mm

に注目される。また、剥片の中にはポイントフレイクも認められる。

資料には、その一部に自然面をもつものが相当数認められる。自然面の観察から、円礫のものは一切確認されずやはり極角礫を利用している。現在の藤原大芦集落の畑には、耕作土中に多くの黒色安山岩礫が含まれており、その形態はいずれも極角礫である。耕作に邪魔なのだろう、それらの礫は畑の一角に集積され塚となっている。このような遺跡地周辺の石材状況を考えると、石器の石材は現地周辺で調達されたものと言えよう。

また、現地での土層確認によると、ローム層中にMK-13（南軽井沢-13）が確認されている⁽³⁾。MK-13は浅間火山を噴出起源とするテフラであり、As-YPの上位に位置づけられている。藤原大芦遺跡で確認された大形尖頭器を含む石器群は、MK-13の降下を相前後する段階に相当する可能性がある。

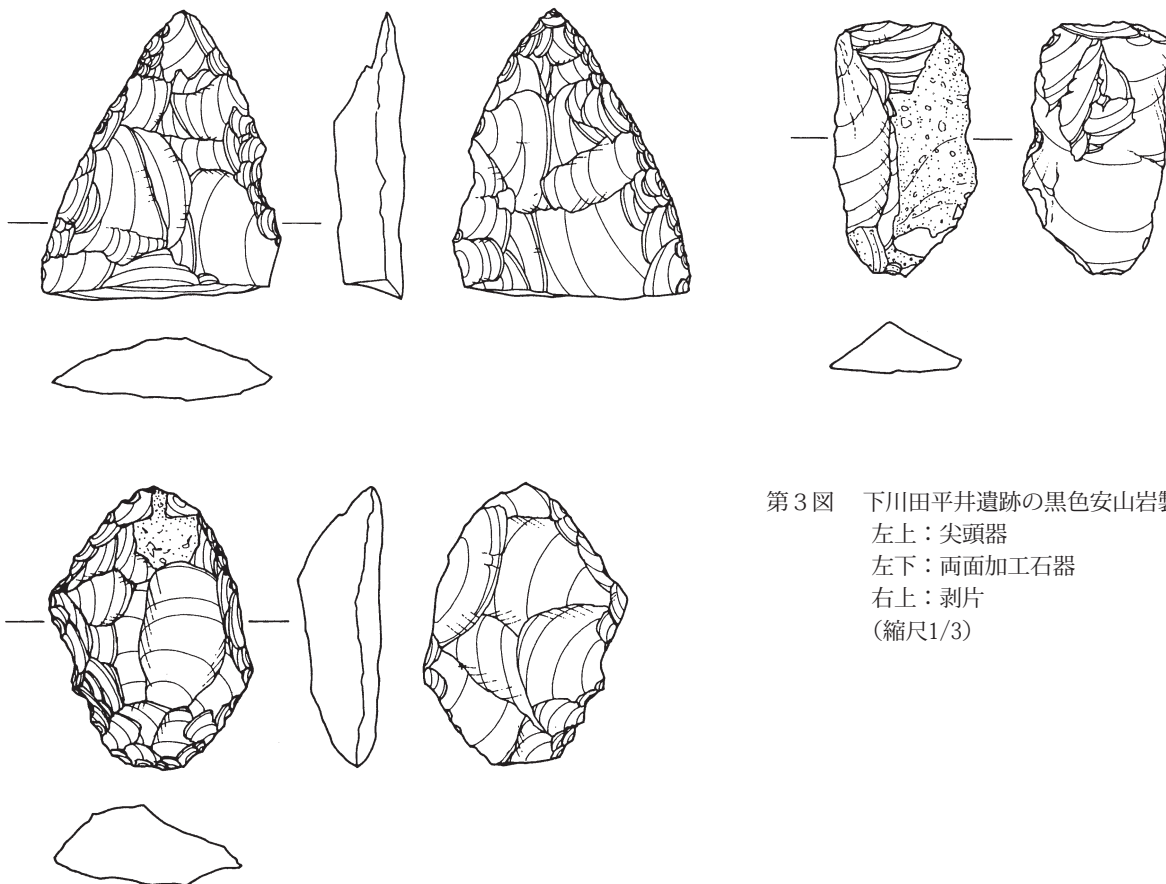
ここまで武尊山麓の二つの遺跡（玉原遺跡・藤原大芦遺跡）について、そこで確認された石器群をみてきた。いずれも発掘調査に拠らない採集資料という制約があるが、共通点が認められる。石器組成および石器の形態に関する点である。二者ともに主要器種は尖頭器とスクレイパーであり、比較的単純な器種組成である。そして、尖頭器の長さは10cmを越えるような大形品である。とも

に土器が確認されておらず、前述のような共通点を考慮すれば、編年的には同じ段階に帰属する石器群として評価できよう。また、石器石材に関する共通点もある。いずれも遺跡地近傍で獲得できる黒色安山岩の極角礫を利用している。使用石材は黒色安山岩に限定され、他の石材は一切認められない。

3 下川田平井遺跡

先述した原産地近傍に立地する石器群との関係を探る目的で、黒色安山岩角礫を一つの指標として他の石器群を観察してきた。その過程で、沼田市の下川田平井遺跡（神谷1993）において、黒色安山岩角礫を利用している石器が存在することが分かった。次に、下川田平井遺跡についてみていく。

遺跡は、黒色安山岩の原産地である武尊山の南西方向に位置する。利根川右岸の段丘上に立地し、利根川との比高差は約40mである（第2図）。遺跡地の標高は約400m。遺跡から北約1kmでは、利根川と武尊山方面から下る薄根川が合流する。薄根川を遡ると支流の発知川を経て玉原遺跡方面に至る。遺跡地周辺は、関東平野方面から利根川を遡り武尊山方面に至るルート of 玄関口にあたる。遺跡から玉原遺跡までの距離は、直線で約18kmである。



第3図 下川田平井遺跡の黒色安山岩製石器
左上：尖頭器
左下：両面加工石器
右上：剥片
（縮尺1/3）

発掘調査により、複数の地割れ跡から大形尖頭器を含む24点の石器が出土している。この地割れ跡の一つは古墳時代の痕跡とされており、石器の出土に関しては、本来の帰属年代を示すような層位的な情報はない。主要な器種は尖頭器とスクレイパーであり、尖頭器は未成品も含め複数認められる。スクレイパーは、玉原遺跡で確認された資料と同様の形態的特徴がある。縦長剥片を素材とし、素材剥片の形態を大きく変えることなく側縁部に刃部と想定される二次加工集中部が認められる。

地割れ跡からという限定的な出土状況であるため資料的な制約もあるが、大形尖頭器を組成し器種組成に関しても共通点があることから、先述した玉原遺跡と藤原大芦遺跡の石器群と同様の編年の位置が与えられよう。

一方、使用石材は黒色安山岩と黒色頁岩が認められる。黒色安山岩は3点確認されており、大形尖頭器の破損品1点、両面加工石器1点、剥片1点である(第3図)。両面加工石器と剥片には自然面が残されている。その形状を観察すると、河床礫の特徴である小さな爪状の痕跡は全く認められない。細かい穴が全面に広がり平坦であり、溶岩露頭近接地で採取できる黒色安山岩礫の表皮に酷似している(写真5・6)。下川田平井遺跡出土の黒色安山岩製石器の一部は、河川流域ではなく山麓の溶岩露頭近傍で獲得した石材を利用している。

4 黒色安山岩の獲得

下川田平井遺跡において溶岩露頭付近の特徴をもつ黒色安山岩角礫が認められたことは、石材の獲得活動を考えると、河川流域だけでなく溶岩露頭近接地が石材入手の場として機能していたことになる。しかし、黒色安山岩製石器の原産地分析が未実施のため、下川田平井遺跡の石器が武尊山産であると断定はできない。遺跡地周辺と武尊山は比較的近距離関係にあること、玉原方面への玄関口に立地することを考慮すると、下川田平井遺跡の黒色安山岩角礫は、武尊山の溶岩露頭付近で採取したものである蓋然性が高い、と指摘するにとどまる。

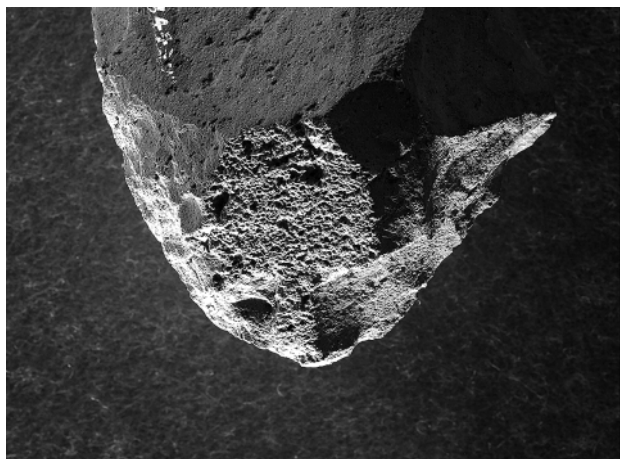


写真5 下川田平井遺跡 両面加工石器
中央に自然面が見える。

さらなる視点としては、当該期の石器群について、角礫状の黒色安山岩が出現する頻度とそれが認められる地域が問題となるであろう。玉原遺跡、藤原大芦遺跡はともに山懐に位置し、その立地環境が特筆される。当該期の集団の活動領域が、このような山中にまで拡大していたことが注目される。しかし、黒色安山岩の獲得という観点からこれらの遺跡を評価すると、多大な労力をはらい石材獲得のために山中に赴く必要は全くない。武尊山周辺の河川流域から旧利根川中流域までは黒色安山岩が存在しており、そこで石材の入手はこと足りるからである。

下川田平井遺跡という一遺跡で極角礫の黒色安山岩が認められたことだけで、武尊山の原産地近郊が石材獲得において恒常的に機能していたとするのは時期尚早であろう。原産地付近に遺跡があることと、そこが石材の獲得において原産地遺跡といわれるような中核的な機能を負っていたかどうかは分別して考えていかなければならない。人の活動がそのような山間部にまで及んでいるのは、石材獲得とは異なる理由が主であることも想定されよう。



写真6 下川田平井遺跡 剥片
右側全体が自然面である。

おわりに

武尊山中の原産地周辺は、石材を補給する上でどのように機能していたであろうか。そのためには、玉原遺跡や藤原大芦遺跡のように原産地周辺に立地する石器群と他地域に所在する石器群との関係を探ることになる。原産地から離れた遺跡での角礫状黒色安山岩の動向が一つの目安になる。そしてまた、原産地分析によって、分析対象の石器が武尊山産である裏付けをとることも必要であろう。

ところで群馬県域を概観すると、特に赤城山周辺には、大形尖頭器を組成する石器群であり旧石器時代最終末から縄文時代草創期初頭に位置付けられるものが認められる(阿久澤2014)。その中でも荒砥北三木堂遺跡(岩崎1992)と房谷戸遺跡(谷藤1992)は注目される。それは、分析資料として充実しているだけでなく、武尊山との距離関係あるいは武尊山産黒色安山岩の採取可能地域⁽⁴⁾との距離関係でみたとき、この二つの遺跡は格好の比較資料となるからである。房谷戸遺跡は武尊山からは比較的遠距離に位置しているが、採取可能地域である旧利根川流域からは近傍にある。一方、荒砥北三木堂遺跡については、武尊山からはかなり遠方に位置し、採取可能地域の旧利根川河床からも離れている。

房谷戸遺跡は赤城山西麓地域に位置する。房谷戸遺跡から玉原遺跡までは直線で約35kmあり、比較的遠距離に位置する。利根川と吾妻川の合流地点左岸の丘陵上に立地し、利根川との比高差は約120mである。遺跡の標高は約300mである。遺跡地から利根川まで直線で約1kmであり、黒色安山岩の採取可能地域の近接地に立地している。

一方、荒砥北三木堂遺跡は赤城山南麓地域にある。当該地域を南北に流れる荒砥川左岸の台地上に立地する。標高は約90mである。黒色安山岩の原産地である武尊山は、赤城山を挟んだ北側に位置し遺跡地から遠方にあたる。また、石材採取可能地域の利根川に関しては、最短距離の前橋市付近まで直線で約8kmある。

以前に、玉原遺跡の石器群に対して評価したことがある(津島2004)。石器石材の獲得に関しては広範にわたる遺跡との関係性は想定できず、恒常的な石器石材獲得の場という評価を与えることはできない、というものである。それは、武尊山中でない河川流域で黒色安山岩礫は容易に入手可能であり、石材獲得のために多大な労力をはらい山中に赴く必要がないというのが理由であった。

しかし、拙稿で紹介した通り武尊山周辺に位置する下川田平井遺跡において、武尊山の溶岩露頭近郊で採取した可能性のある石器が確認された。このことから、武尊山の原産地近郊ある石器群と他地域の石器群との関係をより詳細に追究する必要があると実感している。

謝辞

飯島静男氏には、岩石学的知識の全般についてご教授頂いている。中村正芳氏には、武尊火山についてご教授頂いた。岩崎泰一氏には、特に黒色安山岩に係る研究を通じて啓発されることが多い。誌上を借りて感謝致します。

註

1) 黒色安山岩という岩石名称については、中東・飯島1984による。
2) 群馬県域では、旧石器時代の石器石材として、一般的に黒色頁岩より黒色安山岩の使用頻度の方が高い、しかし縄文時代の石器を概観すると、それが逆転し黒色頁岩の利用頻度の方が高くなる、という研究者間の共通認識があると思う。その現象の理由として、縄文時代に盛行する打製石斧等の石材には、その使用効率等を考えると黒色頁岩の方が適しているなどの説明が特に根拠なくなされてきた。

ところが、旧石器時代の黒色安山岩をめぐる石材環境の復元によって、As-BPgroup降下前の段階から河床での黒色安山岩礫は減少の一途をたどることが分かってきた。縄文時代の石器石材に黒色安山岩より黒色頁岩が多用されている理由として、そのような黒色安山岩に関する河川での現象が関与していることも今後考えていく必要がある。

3) 早田勉氏の分析による。詳しくは、岩崎・津島2011を参照。

4) 桜井・井上・関口1993による。筆者もこれにならい、原産地と採取可能地域を区分して理解している。黒色安山岩に関しては、溶岩露頭及びその近接地であって露頭より一次的に剥落した原石が認められる場所を「原産地」として限定的に把握している。そのような原産地から離れた場所であっても、そこを起源とする石材が採取できる河川流域等を「採取可能地域」としている。

現在の利根川の河床礫調査によると、前橋市付近の利根川中流域までが武尊山産黒色安山岩の採取可能地域となっている。旧石器時代から縄文時代にあっても、石材環境に関してはこれと同様に旧利根川の中流域までが採取可能地域であったと理解している。

引用・参考文献

- 阿久澤智和 2014「利根川以東の関東地方縄文時代草創期石器群」『岩宿フォーラム/シンポジウム 石器の変遷と時代の変革-旧石器から縄文石器へ- 予稿集』 20～26頁
- 阿子島香 1989『考古学ライブラリー 56 石器の使用痕』
- 井上昌美・桜井美枝 1999「第4文化層出土黒色安山岩の分析」『三和工業団地Ⅰ遺跡(Ⅰ)-旧石器時代編- 群埋文調査報告書246集』 222～225頁
- 岩崎泰一 1992『荒砥北三木堂遺跡Ⅱ 群埋文調査報告書136集』
- 岩崎泰一・津島秀章 2011「みなかみ町藤原の石槍製作跡-武尊山産黒色安山岩の源郷を探る-」『群埋文研究紀要』 29 41～52頁
- 岩崎泰一・津島秀章 2014「みなかみ町藤原の黒色安山岩溶岩露頭」『群埋文研究紀要』 32 1～7頁

研究紀要34

- 岩宿フォーラム実行委員会 2006「細久保沢黒色安山岩原産地露頭について」『第11回石器文化交流会-発表要旨-』30～33頁
- 神谷佳明 1993『下川田下原遺跡 下川田平井遺跡 群埋文調査報告書147集』
- 桜井美枝・井上昌美・関口博幸 1993「群馬県における石器石材の研究（1）-竊川流域における石器石材の調査-」『群埋文研究紀要』11 1～14頁
- 桜井美枝 1995「河川における石器石材のあり方」『第3回岩宿フォーラム/シンポジウム予稿集』13～16頁
- 谷藤保彦 1992『房谷戸遺跡Ⅱ 群埋文報告書129集』
- 中束耕志・飯島静男 1984「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材-黒色頁岩と黒色安山岩-」『群馬県立歴史博物館報』5 28～36頁
- 津島秀章・桜井美枝・井上昌美 2001「黒色安山岩の原産地試料」『群埋文研究紀要』19 139～156頁
- 津島秀章・岩崎泰一 2010「武尊山産黒色安山岩の消長-石材資源の動的理解に向けて-」『群埋文研究紀要』28 1～16頁
- 津島秀章 2004「石器石材の補給構造-沼田市・玉原発見の石器群から-」『ぐんま史料研究』22 1～16頁
- 津島秀章 2008「上武道路・旧石器時代遺跡群の黒色安山岩製石器の原産地分析」『上武道路・旧石器時代遺跡群（1） 群埋文調査報告書418集』395～399頁
- 津島秀章 2010「黒色安山岩製石器の原産地分析」『上武道路・旧石器時代遺跡群（2） 群埋文調査報告書478集』436～439頁
- 山口尚志 1981「武尊火山の地質」『地質学雑誌』87-12 823～832頁